

紛争を経験した人々と腰を据えて付き合う

さまざまな民族や宗教が共生し、理想の国」とも言われた南東ヨーロッパの旧ユーゴスラビア連邦。しかし東西冷戦後、この国に変化が起こった。連邦内で次々と独立運動が起こったのだ。

戦闘、略奪、虐殺などが日常的に繰り返され、住んでいる土地を追われたのは約380万人。国際機関やNGOが難民支援に乗り出し、日本のNGOスタッフがだった松永知恵子さんは、クロアチアで難民の心のケアに携わっていた。

「紛争が終わっても心の傷はなくなりません。それが表面化するにも、癒えるにも長い時間がかかる」。松永さんがそう実感しながら活動を続ける中、中東やアフリカでも紛争が発生した。旧ユーゴ圏で活動していた多くの支援団体は他の地域に移り、松永さんが所属していた団体も撤退を余儀なくされた。

「社会の再生は、一人一人の心が生きる」ことから始まる。心のケアにはもっと長期的な支援が必要なのに……。松永さんは自身の力で支援を継続するため、立ち上がった。こうして生まれたのが、NPO法人ACC・希望だ。

まず取り掛かったのは、紛争の影響で難民となってしまった子どもたちのサポートだ。クロアチアやセルビア、コソボで暮らす難民たちは、外の世界か



コパチチェボ社会福祉住宅では、歌ったり絵を描いたりしながら創造性を養い、心を解放していく

ワークショップを通して変わっていった少年

2012年からはJICA草の根技術協力事業を活用し、セルビアの2地区の子どもたちを対象にしたワークショップを開始。毎月2回、難民センターや社会福祉住宅などで音楽や絵画などを通じて創造性を育み、彼らの生きる「希望」を見いだすためだ。

集まってくるのは、紛争が生んだ複雑な家庭環境に育った子どもたち。当初はけんかやいじめ、非行が日常茶飯事で「厳しい状況だった」と松永さんは振り返る。それでも民族や宗教に関係なく、みんなが対等な立場で楽しむ

ら閉ざされた環境にある。子どもたちは心身ともに疲れ切っているように見えた。「彼らの心を解放しなければ、この地域の未来はない」。ACC・希望のスタッフたちは、普段の生活と違う海辺でのワークショップ、日本やヨーロッパの若者との交流会を各地で開いた。

また、生まれ故郷を追われ、孤独に苦しむ女性や高齢者にとって生きがいとなる場を提供したいと、コソボ難民女性のための手芸品製作プログラムにも取り組んだ。松永さんたちの役割は苦難の中にある人々を助けること。し



ことができるよう、それぞれの作品を鑑賞したり発表の場を設けたりと、互いを知り、尊重し合える環境づくりに力を注いだ。

すると少しずつ、子どもたちの変化が目に見えるようになってきた。最初はうろろしたり叫んだり落ち着かない様子だった知的障害のある男の子が、ワークショップを通じて仲間と居場所を見つけ、生き生きし始めたのだ。「他者との距離感や人間関係を学ぶことも大切な目的の一つです」と松永さん。グループの中で一人一人が役割を見つけ、それを全うすることで、子どもたちの人間関係の構築を後押ししていくのも狙いだ。

また、セルビアでのパートナーNGO「ズドラボ・ダ・ステ(ZDS)」の若手スタッフの能力向上もACC・希望が力を入れている活動の一つだ。セルビアでは「この国には未来がない」と口にする人が多い。ZDSの若手メンバーたちも、今までは「ただなんとなく」ワークショップに関わっているように見えたという。年長者の意見が尊重さ



国際協力の担い手たち

NPO法人ACC・希望

絶望の中で見つける希望

今もなお、この地の多くの人の心に影を落としていること。それは旧ユーゴスラビア解体の過程で起きた紛争だ。現地の人々が幸せを実感できる日が来るよう、NPO法人ACC・希望は奮闘している。



ワークショップの参加者と共に体を動かし、リラックスした雰囲気をつくる松永さん(右)



難民センターの子どもたち。普段はとても元気だが、昔からこの地域で暮らす子どもたちとの間には溝がある

れがちな社会。しかしこの活動の中では若手スタッフの意見交換の場を設けてアイデアを取り込むなど、彼ら自身が責任感とやる気を持ってプロジェクトに取り組めるように努めた。すると次第に、「子どもたちにもっと良いプログラムを提供したい」との声が上がるように。ワークショップを共同で続けるうちに起こった彼らの心の変化は、松永さんにとって何よりの喜びだ。

「人の心に関わる以上、いったん始めたら途中でやめることはできません。最初から長期的に続ける覚悟でした」と、真つすぐに前を見て話す松永さん。絶望の中にある人々が、自分たちの力で希望の光を見つけられるように。これからもそのきっかけづくりに挑戦していく。